

◆特集◆

## 研究所プロジェクト 「越境の文学」研究について

名古屋学院大学国際文化学部 土屋 勝彦

本日は人間文化研究所十周年記念のシンポジウムにご招待いただき、誠にありがとうございます。ただいまご紹介いただきました土屋です。私は今年三月まで本研究科に所属し四月より名古屋学院大学へ転任しました。ちょうど本研究科のプロジェクトにも十年間参加させていただきましたが、本研究は、科研費基盤研究Bにも採択された課題であり、テーマは世界の越境文学研究です。その概要を年代順に並べますと以下のようになります。

### 越境する文学の総合的研究

二〇〇五年度～二〇〇七年度

近年の世界の文化活動は、グローバルゼーションとローカリゼーションという両極の中で揺れ動いてきたが、そうした潮流に新風を吹き込む越境的な文化活動に注目し、とりわけ文学をフィールドとする作家たちのトランスカルチュラルな活動を総合的に研究することが本研究の目的

である。英語圏、ドイツ語圏、ロシア語圏、東欧、日本語圏における過去および現在の越境作家たちの歴史的、社会的な役割とその方向性を考察し、今日の「越境文化」を支える彼らの文化的営為の諸相を明らかにすることが目的である。成果として、メキシコ系アメリカ文学の越境性、中欧文学と地域的アイデンティティ、カリブ海作家エドゥアル・グリッサンのヴィジョン、ドイツ語圏越境作家たち、言語遊戯と多文化性、ハンガリーにおける国民文学から越境文学への軌跡、ブラジル日本文学、日本語越境文学というテーマを持つ諸論文にまとめられたが、そこに共通するのは、移民や亡命、漂流、移動といった経験を内包する「越境」とは、文学の本質にあること、そして優れた作家・作品を掘り起こし読み込み、それぞれの作品が有する生の諸相や時代精神との関わりに共感し、それを批評の言葉に変えていく努力の重要性を再確認

できたことである。また、越境文学が単にマイノリティ文学に留まることなく、各国民文学を革新し豊饒化する潜在力を秘めており、世界文学に開かれていく可能性を持つことを検証した。

### 世界文学における

#### 混成的表現形式の研究

―移民文学を中心に―

二〇〇八年度～二〇一〇年度

各国言語圏文学における混成的な表現に着目すれば、それぞれの異郷者が持つ複数言語間のゆらぎ、きしみ、ズレに苦悩しつつも、それを新たな文学言語創造への果敢なる挑戦としてとらえ、閉ざされた「国民文学」を打破し、多言語の反響しあうインターカルチュラルな文学へと飛翔するパトスを見出すことができる。そこに従来の「移民文学」からオムニフォンの交響樂たる「世界文学」へと架橋するひとつの視座を設定できよう。本研究は、クレオリ的な混成と融合によって独自の文学様式を生み出してきた各国の移民文学や亡命文学を中心として、その融合的ないしは相互反響する表現形式の特質とその現代的意義を説明することを目的とする。すなわち、混成的なエクリチュールの特質の考察、そうした表現形式を生み出した時代

背景と文化社会的意味の解明、その将来的方向と現代文学における可能性の究明、「移民文学」の新たな意義と定義付けの試行、ポストコロニアルな文学現象に関する文学理論の再構築という五つの課題の解明である。

### ポストエスニック時代の

文学におけるオムニフォンの意義  
二〇一二年度～二〇一四年度

本研究は、越境、移民、植民、離散、強制移住等によって母語を喪失ないし内化し、居住国の言語による文学創造に向かった越境的作家たちの諸作品に通底する多層的・多重的な文学ディスクールのあり方を、ポストコロニアル文学理論やポストモダン文学理論といった歴史的視点のみならず、空間的な同時性をとらえる「群島の思考」から再検討することにより、そこに相互反響する「オムニフォン」の動的構造を解明することにある。研究成果としては、フランス語圏カリブ海文学、英語圏チカーノ文学、ドイツ語圏移民文学、ロシア語圏亡命文学、日本語圏における外国文学や外地文学を対象として、それらの文学が有する表現可能性と文学史的意義と特質を析出し、時間化された歴史的意識を空間化する「列島の」ないし「群島の」あり方を検

証・解明した。

以上のプロジェクト研究を推進するにあたり、この十年間様々のシンポジウムを行ってきましたので、それらを振り返っておきます。研究メンバーは、学内ではアメリカ文学の田中敬子氏、欧米移民史の山本明代氏、近現代日本文学の谷口幸代氏、学外ではロシア・東欧文学の沼野充義氏（東京大）、比較文学の西成彦氏（立命館大）、比較文学の管啓次郎氏（明治大）、文化人類学の今福龍太氏（東京外大）です。

二〇〇五年一月九日のシンポジウム「いかにして日本語作家となったのか―境界を超える現代日本文学」では、日本語による創作活動を行っている現代越境作家たちが一堂に会して、越境文学の過去と現在について自由に語り合い、日本語で創作する根源的な課題や今後の方向性について討議しました。パネリストは、多和田葉子氏（日独語作家、ハンブルク在住）、デビット・ゾペティ氏（フランス語圏スイス人日本文作家、東京在住）、アーサー・ビナード氏（アメリカ人日本語作家、東京在住）、毛丹青氏（中国人日本語作家・神戸国際大教授、神戸在住）でした。

二〇〇六年一月一六日「越境文学の現況をめぐって」では、沼野充

義氏（東京大学大学院人文社会学系研究科教授）、今福龍太氏（東京外国語大学大学院地域文化研究科教授）、西成彦氏（立命館大学大学院先端総合学術研究科教授）、管啓次郎氏（明治大学理工学部教授）をパネリストに迎えて、中欧、ロシア、北米、南米、日本、カリブ海と広がっていく越境文学の諸相と現況について発表および討議を行い、世界における越境文学の諸相と可能性をめぐって活発に意見交換しました。

二〇〇八年一月一三、一四日の「世界の移民・亡命文学の現況と可能性」では、フランス語圏三名、英語圏二名、東欧語圏三名、ドイツ語圏一名、日本語圏二名の若手・中堅研究者の発表がありました。つまりフランス語圏セッションでは、中村隆之「グリッサンとヨクナパトーフア」、笠間直穂子「ミハイル・セバステイアン『事故』について―バカレスト、リエージュ、カルパチア」、鶴戸聡「カテブ・ヤシン、あるいはアルジェリアの世界文学」という発表があり、英語圏では、基調講演として、越川芳明「ボーダーラズから見たアメリカ」と、山本伸「英語圏カリブ海地域の文学における「揺れ」の美学―ラブレイス、シニア、ダギェア、カーン、チェンラを中心に」という二つの発表、さら

にロシア・東欧語圏では、井上暁子「ドイツ在住ポーランド人作家の文学における（わたし）語り」、奥彩子「移動、言語、アイデンティティ―旧ユーゴ移民文学」、竹内恵子「眩惑するアメリカ―亡命ロシア詩人ブロッキの移住から同化まで」、ドイツ語圏は、浜崎桂子「他者性のジレンマ―二千年代ドイツ語圏移民文学」、日本語圏としては、崔正美「女性の移動とアイデンティティ―李良枝『由熙』、水村美苗『私小説』、楊逸『ワンちゃん』を通して」、前嵩西一馬「沖繩表象を詠る」という二つの発表があり（以上敬称略）、世界における越境文学の状況について、各語圏を横断して様々の視野から幅広く共通の問題意識から討議しました。また、以上二つのシンポジウムをもとに、共同研究の成果として日本学術振興会研究成果公開促進費を受けて『越境する文学』（水声社、二〇〇九年）を出版することができました。

次に二〇〇九年一月七、八日に国際シンポジウム「アイデンティティ、移住、越境」を開催し、多和田葉子、エミーネ・エツダマ、ウラジミール・カミナー、ウラジミール・ヴェルトリプ、ツェーラ・ツイラクという新進気鋭のドイツ語圏越境作家を迎えて討議しました。ドイツ語

圏移民文学が現在どのような様相を呈しているのか、増大するグローバル化現象に対してどのような文学的価値を持ちうるのか、ドイツ語圏文学において、さらには世界文学において、今後どのような役割を果たすのか、移民・亡命作家たちとともに精力的に議論したわけです。多和田葉子（一九六〇年東京生まれ、日独作家、ベルリン在住）、エツダマ（一九四六年マラチャ生まれ、トルコ人ドイツ語作家、ベルリン在住）、カミナー（一九六七年モスクワ生まれ、ロシア人ドイツ語作家、ベルリン在住）、ヴェルトリプ（一九六六年レニングラード生まれ、ユダヤ系ロシア人ドイツ語作家、ウイーン在住）、ツイラク（一九六一年イスタンブール生まれ、トルコ人ドイツ語作家、ベルリン在住）という蒼々たる作家たちでした。前記した科研メンバーのほかに、広島大学のフェダマイア氏や立教大学の浜崎氏、東京大学のグレチュコ氏、東京大学のイヴァノヴィチ氏も発表し、それぞれの問題意識を共有しつつ意見交換したのです。その成果の一部として、本研究科の研究出版助成を受け『反響する文学』（風媒社、二〇一二年）を上梓しました。

二〇一〇年一月二日―八日のシンポジウム「越境文学の現在―中国語文

学および日本語文学を中心に」では、毛丹青氏とリービ英雄氏をゲストに迎えて、現代中国語文学および日本語文学における越境性について報告および討議しました。毛氏は現代中国の加速度的な近代化過程を祖述し、母語よりも日本語の包容力と柔軟性が創作言語として選んだ理由だとし、リービ氏は、異言語に身をさらして時間と空間を超えていくメタフォリックな越境の創造力を目指して執筆しています。

さらに、二〇一二年二月八、九日には、明治大学和泉図書館ホールにて、シンポジウム「世界文学におけるオムニフォンの諸相」を行いました。まず第一セッション「ドイツ語圏作家における多言語・文化性」として、山本浩司「ルーマニアの雉―ヘルタ・ミュラーにみる土俗性」、関口裕昭「多文化地域ブコヴィーナと初期パウル・ツェラン」の二つの発表があり、東欧地域におけるドイツ語圏作家の多層的・多文化的な問題意識を考察しました。第二セッション「東欧語圏作家における多言語・文化性」では、阿部賢一「多言語のプラハ」、加藤有子「ポーランド東部国境地帯における多言語的創造」、亀田真澄「分裂する言語のあいだで―セルビア多言語地域の少数民族と文学」という三つの発表があり、口

シア・東欧地域の多言語的状况と文学について、チェコ、ポーランド、セルビア・クロアチアという地域の様々な現象を比較しながら、共通点と個別に異なっている側面を検討しました。第三セッション「ダイアレクトから世界へ」では、今福龍太「イントロダクション・俚言の政治学―ゲール、バスク、クレオール、アヤグ」、川満信一「ミクロ言語帯からの文学―スマフツの詩とスマヌパス」、金子奈美「現代バスク文学のことば―キルメン・ウリベ『ビルバオ―ニューヨーク―ビルバオ』を例に」、中村隆之「沈黙する言葉―モシヨアシ、シャモワゾー」の発表があり、ダイアレクトを意識的・戦略的に使用/濫用する新しい文学表現が、未知の世界性へと結ばれてゆく可能性について、アイルランド、バスク、マルティニック、琉球弧などのヴァナキユラーな詩のことばに依りながら検討しました。第四セッション「越えながら書く 台湾、日本、中国、アメリカ」では、温又柔「私の二ホンゴには中国語と台湾語が棲んでいる」、林ひふみ「母語からの自由ということ」、リービ英雄「島国から大陸へ」の発表があり、作者の立場から越境文学の可能性を検討しました(以上発表者の敬称略)。

二〇一三年一月二日には国際シンポジウム「多言語が響きあう文学―ドイツ語圏越境作家たちとも考える」を行い、レオポルト・フェダマイア、アンナ・キム、テレツィア・モーラ、イルマ・ラクサ、ザビーネ・シヨル、多和田葉子という気鋭の作家たちを迎え、複数言語の狭間に生きる現代作家たち、あるいは多言語の海に浮遊する多層的多元的な越境作家たち、彼らの目に映るアイデンティティ、異邦性、他者性、国民国家とは何か、また彼らがドイツ語作家であることの意味は何か、規範的なドイツ語表現からの逸脱と革新、新たな表現の可能性はどのような開かれるか、などアクチュアルな文学的諸問題について、熱い討論が繰り広げられました。現代ドイツ文学の大きな一角を担っている「異文化横断的文学」あるいは「他者性の文学」創造の現場からの声を聴き、精力的に意見交換することができたのは貴重な成果です。彼らのプロフィールは以下の通りです。

レオポルト・フェダマイア.. 一九五七年オーストリア生まれ、ザルツブルク大学にて文学博士号取得、ラテンアメリカ、フランスに度々滞在し、作家、翻訳家、評論家として活動。現在広島大学教授。多言語話者。二〇一二年オーストリア翻訳賞受賞。アンナ・キム.. 一九七七年韓国生まれ、翌年西ドイツ、オーストリアへ移住。ウィーン大学にて文学修士号取得、ウィーン在住の若手有望作家。テレツィア・モーラ.. 一九七一年ハンガリー生まれ、一八歳でベルリンへ移住、フンボルト大学で学ぶ。ベルリン在住の作家、翻訳家。二〇一三年ドイツ図書賞(ベスト小説賞)受賞。イルマ・ラクサ.. 一九四六年スロヴァキア生まれ、スロヴェニア人の父とハンガリー人の母の間に生まれ五歳でスイスに移住。チューリヒ大学で文学博士号取得(ロシア文学)。チューリヒ在住の作家、翻訳家、評論家。多言語話者。越境文学のパイオニア作家。ザビーネ・シヨル.. 一九五九年オーストリア生まれ、ウィーン大学にて文学博士号取得。アメリカ合衆国にも長期滞在。ベルリン在住の作家。パツハマン賞審査委員歴任。多和田葉子.. 一九六〇年東京生まれ、二二歳からドイツ・ハンブルクへ移住。チューリヒ大学にて文学博士号取得。ベルリン在住の日独作家。多数の文学賞受賞。

二〇一四年一〇月二五日に行われたシンポジウム「日本文学における越境の諸相」では、西成彦氏(立命館大学教授)の「比較植民地文学の試み―交差的な読書について」やダグ・スレイメーカー氏(ケンタッキー

大学教授)の「越境を越える、文学考察」のほか、魏晨「交錯するまなざし 齟齬する満州夢」、張ユリ「大衆に一九三〇年代を訴える」、岡英里奈「一九四〇年前後の岡倉天心像」などの発表があり、日本近現代文学における越境の主題について活発に討議しました。

以上のシンポジウムはすべて報告書を作成しましたが、改めて振り返って越境文学研究の魅力を考えますと、やはり母語や故郷といった世界から一端切り離されて異境に身を置く経験から生まれてくる越境者の文学には、いわゆる国民文学の視座からは見えてこない新たな表現形式や異質性が全景化され、複数の移動するアイデンティティによる重層的な世界像が提示されており、それが私たちの心を打つのだろうと思います。こうした越境性は、じつは文学の本質に深く関わっている特徴でもあります。文学では、普通の意味でのリアルな世界を表現するのではなく、ことばによって表象される世界こそがリアルなものなのです。あるいはこう言っていいかもしれません。文学では、いまここにある世界が絶対的な実在界ではなく、むしろ可能性の一部に過ぎないという認識から出発します。メタファーや両義性によって認識される複層的現実

性こそがよりリアルなものとなります。リアルであるという感覚は、人間の認識や知覚に現れる文化的記憶そのものだからです。この文化的記憶の基層から掘り起こされて表現される様々な現実相は、境界を越えていく文学的想像力が諸現実を多層化し異化する結果生ずる可能態であり、それが複層的かつ多義的な現実理解への可能性を開くのです。

さて、かつてポストコロニアルの文学者たちは、抑圧された側から宗主国の言語を収奪し換骨奪胎して新たなクレオール的言語形式を生み出し、支配文化への抵抗力を示しましたが、現在の移民・亡命作家たちも、同様に既存の規範的文化や制度への反抗として、あるいは移住社会における他者排除・搾取の実態を告発する文学を生み出してきました。もちろん現在ではむしろ言語遊戯的な革新や多文化共生・共存へのユートピアを提示することもあります。ことばとことばの狭間にある亀裂やズレ、違和感を逆手にとって遊戯空間を生み出していく姿勢、あるいは様々な文化や言語、民族が衝突しながらも、そこから新たな文化的創造力が生まれてくる異種混交性(ハイブリディティ)といったものが現代文学シーンに大きく貢献しており、その結果現代ドイツ語圏文学でも、重要な文

学賞を多くの越境作家が受賞しています。そして現在の世界文学を考える場合、異境の世界に生きることを選択した越境作家の文学を抜きにしては語れないでしょう。移民、亡命、離散、追放、自由意志、地理的かつ歴史的境界の地勢・環境など様々の理由により、「母語」や「故郷」から離れ新たな移住国において獲得言語により創作する作家たち、あるいは当初より複数文化を体現しつつその境界上に生きる作家たちの諸作品から、現在の世界文学へのアプローチを考えてみるのが重要です。故郷や母語から引き離された者は、アイデンティティの動揺・喪失と他者を強く経験しつつ新たな自己意識を創造するなかで、獲得言語あるいは複数言語による言語表現に向かいます。これは、移民文学、ポストコロニアル文学、マイナー文学、脱領域性の文学、周縁の文学、他者の文学、あるいはオムニフォン文学やエクスフォニー文学などと呼ばれる文学ジャンルすべてに通底する現象でもあります。安定した土着・郷土性という所与の生存条件を懐疑ないし否定し、新たな自己変革・創造に向かうことを強いられた(あるいは主体的に選び取った)越境者にとって、文学を創造することは、既存の規範的な「国民文学」やナショナルリズム

への抵抗ないし離反の相貌を呈するのです。それは必ずしも樂觀的な多文化共生のユートピアを提示できず、むしろ悲哀と苦悩に満ちた自己解体から新たなアイデンティティへの希求と挫折に至る場合もあります。しかし様々の言語文化の交錯・衝突する表現の磁場にこそ、「国民文学」を超える、しなやかな「世界文学」への確かな架橋を見ることができるともいえず。他者として排除された「歴史的トラウマ」から反転的に照射された自己像を再構成する過程で、新たな「世界文学」への展望が開かれる可能性があります。

ジェイムス・ジョイスやベケットをはじめ多くの越境作家が現れた英語圏や、グリッサンやシャモアゾーが登場した仏語圏では、すでにポストコロニアルのクレオール文学が定着していますが、ドイツ語圏においても、ロマン派のシャミッソーをはじめ、一九世紀以降リルケ、カフカ、カネッティ、ツェランなど、広義の意味で多言語性や越境性を体現する作家が登場してきました。現代のドイツ語圏越境作家としては、シンポジウムに参加したトルコ人作家のエツダマやロシア人作家ヴェルトリプ、スロヴェニアとハンガリーの混血作家ラクサヤハンガリー人作家モーラといった長老・中堅作家たち以外

にも次々に越境作家たちが登場し活躍しており、ドイツ語圏文学界にとっても大きなシェアを有する力となつています。優れた文学が有する特徴として、「言語化し得ないものの言語化」ないしは「不可視のもの可視化」、さらには「多文化性の共鳴」や「ポリフォニー的多極構造」が見られますが、それは閉じた体系に分節化する言語表現を打破し、そこから逃れようとする比類なき一回性と普遍性を同時に志向する文学的創造力の所産でありましょう。言語や民族、ナシヨナリズム、ジェンダー、階級、モノロジック性、アイデンティティ探求、ミメーシスのな世界観といった合理的な時空の統一を前提とする全体主義的、近代主義的文学観の境界を乗り越えようとした現代文学の多くが、越境文学の実験場として、既存の文学様式や世界観を革新し超克しようとする前衛的革新的文学への転回を実現してきたのです。また、越境作家の作品に見られる多言語性とは、単一の言語の中にもさまざまな言語が響き合っているという事態を指します。まさに内なる他者性の意識が複数文化の共鳴を呼び起こすわけです。言語、国民文学、民族という三位一体の国民国家意識の形成が近代を特徴付けてきましたが、現代はそういった境界

意識が後退し、様々な言語文化が共存・併存する間テクスト性により相互反響する万華鏡のように、横断的理想像力により再構成される越境の文学が確かな地歩を固めつつあります。またこれに関連して、二年ほど前に西成彦氏を中心に発足した「世界文学・語圏横断ネットワーク Cross-Lingual Network」の活動は、越境文学研究にとっても大きな推進力になっており、私も発起人のひとりとして、前回越境文学をテーマにしたセッションで五名の研究者たちとともに、フランス語圏、ドイツ語圏、デンマーク語圏を横断する現代越境作家たちの諸相について精力的に討議しました。

今回のシンポジウムは、「人間、地域、共生」がテーマですが、越境文学はそのすべての要素と関連しています。つまり作家たちが生まれ育ってきた地域から別の地域へ移動しながら、郷土の人々から異国の人々との交流へと世界が広がり、そこで移住先の文化の中でいかに他者と共生するべきかという課題を自ら経験し、そうした経験を獲得言語によって表現していくのです。昨日まで丁度、ドイツ語圏越境作家のイリヤ・トロヤノフ氏を新たな科研費（「ドイツ語圏現代文学における間文化性の研究」）で招待し、東

京、神戸、名古屋で朗読会や討論会を行いました。彼はブルガリア出身でアフリカ、インド、中東に移住した経験をもとに『世界収集家』というベストセラー小説を執筆し、まさに現代文学の旗手と呼ばれています。本書は、その後二五カ国語に翻訳され、最近、早川書房から日本語の翻訳書（浅井晶子訳）も出版されました。十九世紀イギリスの探検家リチャード・バートン卿をモデルにした小説として、異文化への違和感を共感と愛着に変貌させるその驚異的な行動力と吸収・同化力には目を見張るものがあります。また、イタリアの難民収容所のルポから、メッカへの巡礼の旅、タンザニアの徒歩旅行などを経て、アメリカによる個人情報収集の集積の口を暴露・批判し、氷河研究者の伝記的作品を書き、最新作ではブルガリアの冷戦時代の過酷な政治と人生模様を詳細に描いて高い評価を得ました。彼は七カ国語以上の言語を駆使するコスモポリタンの多言語作家であり、偏見なく異文化にぶつかることを信条とする姿勢と行動力には驚嘆すると同時に、まさに多文化共生のお手本のような作家でもあります。

おりしも現在、ヨーロッパでは多くのシリア難民が連日ドイツへ押し寄せており、メルケル首相が難民受

け入れに寛容な政策をとっています。が、百万人を超える多数の難民受け入れには多くの困難を伴うことも事実で、実際強い反発もあります。さらに追い打ちをかけるように、パリで起こったテロ事件が難民受け入れ拒否に世論の一部が向かっており、今後の動向は予断を許しません。が、私は、将来ドイツが多くの難民と共生していく社会の実現に向かつてさらに努力し、結果として彼らの中から新たな越境作家が誕生するだろうと期待しています。かつて旧ユーゴスラヴィアの内戦時に避難・亡命した人々の中からも優れた越境作家が生まれています。日本における日系ブラジル人の方々を含め、世界中の移民・難民・亡命者たちが多くの困難に直面しながらも豊かな多文化共生社会を作るのに貢献できるだろうと信じています。そして世界の様々な地域で見られる文化混濁のしなやかな文学創造力に今後も期待したいと思います。

将来世界の文学史が書き換えられるときには、もはやドイツ文学やロシア文学、フランス文学といった各国民文学単位ではなく、広くヨーロッパ文学や南米文学、北米文学、中東文学、アフリカ文学、アジア文学などといった広域の文学概念、あるいは越境文学や他者の文学、周縁

文学などが提示する様々のモチーフや主題別に文学史が編纂されるかもれません。実際、池澤夏樹の個人編集による『世界文学全集』（河出書房新社）はその一例です。もちろんグローバル化される文学史とは逆に、より地方性の強い郷土文学や地方文学、辺境文学の再評価も進むでしょう。境界を越えていく力と、境界にとどまる力とのせめぎ合う磁場こそが、越境文学を活性化する源泉であり、そこから新たな世界観、新たな視野を与え続けてくれることでしょう。また文学研究の理論には、常に哲学や社会学、歴史学、心理学などの知見が必要不可欠であり、実際これまで様々な学際的方法論が考案・提示されてきました。このような人文社会学の総合的協同的横断的知見から、より豊かな人文知の世界が開かれていくことでしょう。

最後に本研究のご支援に対して改めてお礼申し上げますとともに、研究所のますますのご発展を祈ります。（なお、本原稿は当日時間の関係で相当省略したので、ここに本来の形で掲載していただきます。）